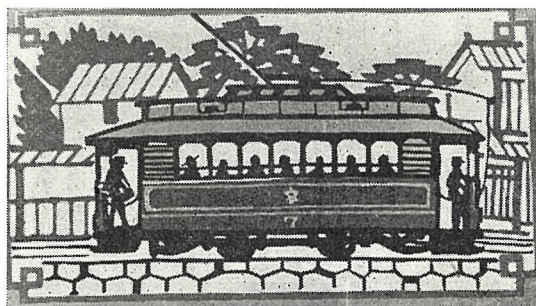


京 日 記



CHRIS PAREL

クリス・パレス

AMHERST DOSHISHA

FELLOW 1966-67

京都での日記のあるページに、私は「この町は互いに異質な面を多分にあわせもつ町である」と記している。とくに、私はアームスト館に住んでいるおかげで、伝統的な日本と新しい日本との対立に目をみはることが多

い。すぐ頭に浮んでくる例をいくつかあげてみよう。私の友人や学生たちは、彼らの両親たちの世代とは別の世代に属している。もちろん、その違いは簡単に目につくものではない。十月二十一日、アメリカのベトナム政策

に反対する全国的なデモが行われ、同志社の多くの学生が参加した。このストライキを声高く指導したのは、左翼学生のリーダーたちであり、彼らはアメリカ本国におけるベトナム政策批判勢力とは何の関係もないのである。これは二十一日のことで、翌二十二日には、私は多くの見物人にまじって時代祭を見物した。その日の夜、私は友人たちと古色豊かな鞍馬の火祭を見物した。鞍馬行きの電車は満員で、そのため鞍馬に着いたときは、時すでにおそく、火祭の中心行事をみることはできなかった。このように新しいものと古いものが共存する姿をもっともよくあらわすのは、アームスト館のおかれてある位置であろう。すなわち、アームスト館はその東と西とを同志社大学と同志社女子大学のキャンパスにはさまれ、南には壮大な御所を、北には禅宗の本山相国寺をひかえている。今日の学生たちの世代は、そんな意味で、まことに興味深々たる世代であり、過渡的世代であると言えよう。

私は、二ヵ月というみじかい滞在期間でもって、日米文化の比較というような微妙で複雑なことを試みうるとは思わないし、このよ

うなことがらに詳しい方々にとつては、私の観察などお粗末なものに見えるかも知れない。しかし、この国がもつ特色のなかで私に大変つよい印象を与えたものがいくつある。まず、日本の文化は「米作文化」であるということがあげられよう。米作りや手仕事や山の多い地形は必然的に農村が集約的労働を必要とすることを意味する。そのため、農家および田畑の規模は個人的な小さな枠内におさまられている。たびたび農村を訪れておどろくことは、農業にたずさわる人々の日常生活の質素さであり、美的見地から言えば、建物や整然と区画された田畑や自然そのものの小規模なまとまりである。日本の農村をながめて、私の視点が大ききとか対自然関係とかに集中するのは、私の本国が大へん広大で豊かで、若々しいからかも知らない。日本の農村にみられる人間対自然の関係、またそこにみられる威厳や洗練された静かな雰囲気そんなもののよさは、アメリカ中西部にひろがる広大な「麦とトウモロコシの文化」とくらべてみると、よりいっそう深く理解できるのではなからうか。この日本の農村にみられる人間と自然の関係こそ、アメリカ人には全

く未知のものであり、これこそ日本の伝統芸術にまさしく表現されているものであろう。

もちろん、今日の日本はもはや農業国ではない。農業に従事しているのは、日本の人口の四分の一にすぎないし、その数さえも年々減りつつあるということである。それにもかかわらず、京都の町のどこを歩いても、そこにみられる美的な枠、文化的な枠、また洗練された静かな個性は、私が農村においてみとめるものと同じものであり、おそらく、これは日本の伝統の中枢をなすものであろう。私

がしばしば心ひかれるのは、日本の自然条件と国民性と日本固有の芸術的基範（しふい）という語であらわされる（との間に存在する関係である）。

×

×

さて、ここである一日を想定して、日本の人たちにとつては当り前のことではあるが、私には驚きの念を感じさせることのいくつかをみてみよう。アモスト館では朝八時に食堂へあつまって朝食をとる。典型的な日本食がだされる

日には、私は洋食を注文することにしていく。これは、べつに日本食がきらいだというわけではない。実は、ほとんどの西洋人にとって、朝の八時に生たまご、御飯、おひたし、みそ汁の食事をとることはできかねることなのです。それから、私は第一講時の教室へ行く。すると必ず学生諸君からじろじろ眺められる。このもの珍しげにじろじろ眺められることは、日本のどこであらうと外国人の経験することである。この好奇心は、日本人が外国のものに示す関心の健全なしるしであ



中央がC. パレルさん

ろうとは考えるが、どうも奇妙な感じであり私を意識過剰にさせるのです。

私の講義はまあまあうまくいっているが、どういうわけか、学生たちはともすれば大へん引込みがちであり、やさしい質問に關しても彼らの答をひきだすことはなかなかの難事である。私の経験では、男の学生の方が意見をよくのべ、自信をもっているようだ。このことは、ちょっとした会合の場合でも言えることであり、他の多くの外人たちもこの奇妙な状況には気づいているようだ。そして、このことは日本が依然として男の国であるという見解を裏づけることにもなる。このほかに、学生たちの目立った点としては、私の本国のこと（とくにケネディ一家、黒人問題、ベトナム問題、アメリカの学生生活など）については一生懸命耳を傾け、それらについて話し合うのを好むということである。こんなわけで、私は、母国の家族や大学のスライドを教室で学生たちに見せたが、彼らの反響はまことに大きいものであった。とくに、私の大学では、寮やフラタニティで週日は夜十一時まで、週末は夜中の二時まで女友達をもてなすことができることや、共に飲んだりパー

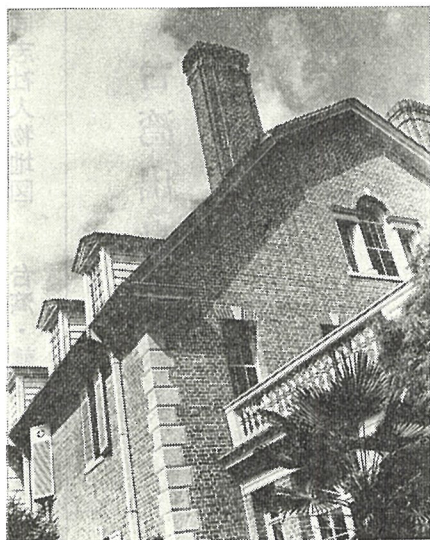
ティをひらくことがアメリカ学生の共同生活に欠くことのできぬ一面であることなどは学生たちをおどろかせた。また、私の興味をそめたことは、学生たちに英語で詩をかかせて提出させたところ、彼らの自作の詩の多くは全くロマンチックな傾向をおびたものであったことである。

午後になると、気晴しのため、私はよくバイクのつて郊外へでかけたり、京都の風景を特色づけている多くの社寺を訪れる。そんなとき、必ずといっていい位に、全く奇妙千萬な民族的現象にでくわす。それは、多くの人たちが身につけている腹巻きであり、京都の蒸し暑い夜のさなかにあっても、この腹巻き姿の人にでくわすのである。

夜は、なにかの懇談会に出ることが多いがそんな懇談の席でとくに目立つことは、居合わせる人々がなんの気おくれもなく、卒直に話すことであり、こんな卒直さはアメリカ人にはほとんど見られない。政治の問題が話題になるとき、私がよくおどろくことは、彼らの立場に柔軟性がないことである。経済学を学ぶ者として、私は、彼らがよく吟味もせずマルクス主義経済学にしはば言及するの

におどろく。私には、マルクス主義経済学は歴史の研究者にとっては興味ある課題であっても、現代の経済に適用しうる可能性はほとんどもないと思えるのです（もちろん、私は、マルクス主義とはやや異っているが、しばしばそれと混同されやすい社会主義のことを言っているのではない）。日本の学生たちのなかで共産主義あるいは極左的運動を支持する人たちは、多くの場合、空論をこねて自分の主義を極度に主張するあまり、ちがった意見をもつ人々の立場を客観的に考える余裕をもっていないのではないかと私はよく思うことがある。事実、来日以来私が経験した唯一の不快なことは、中共路線に立つある学生の論文を訂正したときのことである。と言うのは、彼は、朝鮮戦争をひきおこした（そしてこの戦争に敗れたこと、キューバ危機を背後からあやつったこと、日本や西ドイツの軍隊を核武装したことなど、ありとあらゆることを挙げてアメリカを非難したのである）。

このほかしばしば話題になるのは、教育方法の比較論である。この点において、日本とアメリカの場合では、いくつかの根本的な相



アーモスト館

違点があるが、私にとってもっとも気になるのは、教室での授業のすすめ方における違いである。アーモスト大学ではほとんどのクラスは、いわば教師と学生の対話というかたちですすめられる。学生は、教授の発言に納得できなかったり、賛成できなかったりするといつでも教授に質問する。このことは、単なる事実を学ぶためなら書物があればすむことであるが、知的洞察力ゆたかな質問は、学識ある者のみがなし得るものであるという考え方にもとづいているのである。私は、アーモ

ストでの四年間をふりかえって、教室で真に強調されたことは、いかに問題にとりくみ、それについていかに考えるかと言うことであつたことを思い出す。さらに日本と違っている点といえば、毎週宿題を出され、それがクラス討議の基礎として役立ったことである。最後にもう一つ相違点をあげると、私たちは三年生になるまでは専攻科目を決める必要がなかったこと、そして卒業前にはできるだけ広範囲の科目をとるよう奨励されたことである。この点に関して、私は、日本の高校生が

どのようにして大学進学後の学部を決定しうるのか、また、相互に関連をもつ種々の社会科学や自然科学についての広い基礎知識なしにどうして有能な人材たりうるかといった点に疑問をもっている。

もし、夜の集会在が寮会であればそれは必ずだらだらと長びく。こんなならだらした集会を、私がアメリカで経験したことがない。集会での結論はアメリカの場合とそれほど違わぬとしても、結論にいたる経過がなぜかくも異なるのか、

私は今もって理解できない。彼らが結論をひきだす方法には、問題を概念化して考える傾向があり、私たちが“consensus politics”と呼んでいるものにいささか似ている。

さて、一日が終ると、私は心身ともに疲れ果てる。私をとりまく新しい環境に慣れていないためか、ごくささいな出来ごとでも冒険じみて感じられるのである。

しかし、終始つきまとつた疲労感にもかかわらず、日本でのこの数ヶ月間は充実したものであり、実り豊かなものであつた。それも全くアーモスト館や同志社の仲間をはじめ、日本国民のみなさんのおかげであると感謝している。日本の人たちは心暖く誠意をもって私を迎えてくれた。そして、私は日本の人たちから多くを学びとつた。残念なことながらアメリカへ帰らねばならぬ日も近きつたのである。しかし、アメリカの大学院での研究計画をすすめるために、近い将来ふたたび日本に戻ってくることになるだろう。

(アーモスト・同志社フェロウ)